

イザヤ書25章1～9節、ヨハネ黙示録7章2～12節

ヨハネの黙示録は、小アジアの教会と密接な関係があった預言者ヨハネが書いた「イエス・キリストの黙示」です。黙示（アポカリユプシス）は「啓示」とも訳され、意味は「隠されていたこと（もの）を神があらわにすること」です。本日のテキストで言えば、苦難（試練）の意味が、小羊と表現されているリキリストの贖いの血によって贖われ、救われると言っているのです。

さて、5章で巻物を開くにふさわしい存在として、全世界の審判者である「屠られた小羊キリスト」が呼び出され、その小羊キリストが7つの封印を解くのにふさわしい方であるとの確認がされます（5章6節以下）。そして、小羊キリストが『玉座に座っておられる方の右の手から』（5章6節）受け取った巻物の封印を次々と開いていきます。最初の4つの封印の解除によって現出する幻（6章1～8節）には、騎士が登場し、最後にはそれぞれの騎士が持っている破壊的な力を表現して閉じられます。封印が開かれることで起こる内戦・内乱、インフレ、貧しい者たちを打ちのめす飢饉などが、結果として疫病の蔓延、大規模な人間の死といった終末をもたらすのです。そこにはローマ帝国によって迫害されるキリスト教会の現実の姿が投影されているのです。

当時、ローマ帝国はドミティアヌス帝が治世（81～96年）していた時代で、キリスト者に対する迫害、皇帝礼拝の強要という迫害の時代でした。そのようなときに、「小羊キリスト」が渡された巻物の封印（刻印）を一つひとつ開いていって、6つ目の封印が小羊キリストによって開かれたとき、災害の激しさに王たちをはじめすべての人々を恐怖に突き落とします。なぜなら、迫害を神によってもたらされる世の終末だと受け止めたからです。キリスト者たちは『神と小羊の怒りの大いなる日が来たからである。だがそれに耐えられるであろうか』（6章17節）と悲痛な叫びを上げています。ローマ帝国による弾圧・迫害を、神と小羊キリストの怒りの結果として受け止めているのですが、それらを信仰を通してどのように受け止めて迫害に耐えて行くのか。その問いの前に黙示録の著者ヨハネは立っています。

6章12～17節では、第六の封印の解除による災いによって、天体までもが異変を起こし、天地の秩序が大きく乱れ、すべての人を恐怖の底に突き落としました。天の星が落ち、地上の山も島も移された。これは最終的な審判の裁きが迫っているように人々に思わしめたので、その激しさに王をはじめ全ての人々は、神と小羊キリストによる裁きの日が近づいたと実感します。6章17節の『誰がそれに耐えられるかである

うか』という言葉は、今や最後の封印が残されているのみで、差し迫る最終的な終末時の裁きに直面して絶望的な思いにおそわれています。そして、著者は玉座に座っておられるキリストと小羊キリストの怒りに信仰者たちが耐えられるのかどうかを見ているのです。時は既に最後の第七の封印が開く直前です。終末の破局的な迫害状態の真ただ中で、信仰者は一体どうなってしまうのか。

その問いの前に立たされているキリスト者の姿が浮かび上がってきます。6章17節でローマ帝国の迫害下で『誰がそれに耐えられるかであろうか』という信仰者の問いを受けて、7章1～8節は、キリスト者には神の刻印を押されているがゆえに救いが確実に保証されていると答えているのです。

7章1節が『その後、わたしは見た』で始まるのは、ヨハネ黙示録では新しい幻の光景が始まる時に用いられる表現です。『大地の四隅に四人の天使が立っているのを、著者ヨハネは見ます。当時の世界観では、大地は四角がある平面で、その四隅から吹いてくる風が大地に災害をもたらすと考えられていました。第七の封印が説かれる前という決定的なとき、そのときにヨハネが見た幻は、四人の天使が大地の四隅をしつかり押さえている姿でした。天使が災害を一時的に引きとめているのです。東西南北から吹く風が災いをもたらすと考えられていた時代です。しかも小羊キリストが6つの封印を開いて既に天変地異の異変が起こっている。最終的な審判の時が迫っているという恐怖のなか、4人の天使たちが最後の審判を抑止している。そこへもう一人別の天使が『太陽の出る方角から上ってくる』(2節)のを著者ヨハネは見ます。「太陽の出る方角」とは、生命と光が現れる方角から天使が出現し、力強い言葉を語ります。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない」(3節)と告げるのです。

2節『神の刻印』とは、神の僕である信仰者たちに印を押すための刻印で、印章付きの指輪のこと。具体的には洗礼のことです。ヨハネ黙示録では『刻印』を『封印』とも訳している。パウロは洗礼のことを『神はまた、わたしたちに証印を押して、保証としてわたしたちの心に霊を与えてくださいました』(Ⅱコリント1章22節)と語り、神の所有に属するしるしであるとする。ただ、この刻印は主の日・終末時の救いというよりは、神の怒りから保護されることに主眼があります。終末の厳しい時代に、洗礼を受けた者は神の所有物として、裁きにあうことなく、救われるのだというのです。神の刻印を持っている天使は、四人の天使たちに『神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない』と命じているのです。額に刻印を押すこと＝洗礼は、終末のときに神に属する者たちをサタンからの攻撃から守ってくれるしるしとなるのです。

ただ、4、8節では刻印を押したことの報告はありません。ただ、刻印を押された者の数だけが報告されています。その数は膨大です、刻印を押されたイスラエルの子らの数は144,000人という膨大なものです。この刻印を押された『イスラエルの子ら』とは、キリストの教会のことです。14章1節では『小羊と共に十四万四千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた』とありますが、これは小羊であるキリストの名が刻印された者たちのことなのです。

9節『この後、私がみていると』で再び新しい幻の光景が始まっていることを示されます。今度は天における礼拝が描かれるのです。著者ヨハネは「白い衣を着た義人」の神賛美の光景を見ます。『あらゆる国民、種族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立つて』いる群衆は、小羊キリストの救いに与かる者の圧倒的数の多さを表わしています。小羊キリストの前に讚美を歌う大群衆の光景が幻となって展開していきます。小羊キリストの勝利が、主を信じる者の勝利となり、棕櫚の枝を飾り白い衣をまとった大群衆は、『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊のもの』(10節)と、叫ぶのです。ここでの『白い衣』とは小羊の血で洗って白くしたもの(7章14節)だと言います。血で布を洗えば赤くなりますが、洗礼によって清められて天にある聖徒となっているというのです。

この白い衣は、明らかに主キリストによって身につけられた「晴れ着」です。洗礼を受けた者が白い衣を着ている。ただし、その白い衣は小羊キリストの贖罪の血によって「勝利を得る者」(3章5節)に与えられる衣で、赤くなるどころか白くなるのです。白は信仰者の天上の至福を表わしているのですが、それは地上における死＝血を通して、苦難を通して現実化されると著者ヨハネは理解しています。キリストの罪の贖いにより、信じる者に「義の衣」が与えられ、御座と小羊キリストの前に立つことができたのです。さらには、13節以下で長老が『この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか』との問いに、『彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである』と説明されています。つまり、この勝利を得た者とは、過去において、現在もなお、ローマ帝国の迫害の下で妥協せず屈服せずに生きる信仰者たちのことなのです。英雄的に果敢に戦って討死した者も勝利者であるが、贖罪の血で白くなるような、キリストの贖罪愛に励まされて挫折から守られてきた信仰者たちのことでもあるのです。私たちはこの世で生きている限り、苦難や迫害の経験は大なり小なり経験しています。それらの苦労がキリストの贖いによってすべては克服されて天に生かされているのです。それは天国に市民権を持って生きているかのごとくです。天国にあって神に生かされ続けているからこそ、彼らは復活した存在でもあるのです。